暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二四九号〜

穀雨　四月二十日

塩合

五十鈴川の河口に、汐合という地名があります。海の汐（潮）が合う、私は川水と海水が混じり合う汽水域を指していると思っていたのですが、二つの潮が合う地点であると、江戸時代の津藩士・山中為綱は『勢陽雑記』にしっかりと記していました。

「塩合川　塩合の上にて両方にながれ、二見の里を中にして海に落ち行く。潮汐もふたつの流れをさしのぼり、うしほ（潮）のゆきあふにぞ此名あるにや。俗にはしわひと略語せり。うしほのみちたる時は三町（約三三〇m）ばかり船にてわたりぬ。しわひのわたし（渡し）といふ」

古くは塩合と記し、この地点の上流で五十鈴川は二つに分かれているために朝夕の潮が満ちて来るときにはここで合うと説明されています。

伊勢市二見町溝口にある二見神社の裏手に回ると、汐合にあたる五十鈴川の川辺に出ます。船が一艘、岸につながれていて、かつての「しわひの渡し」を思わせました。鎌倉時代初めにこの渡しを馬に乗って渡ったのは、鴨長明です。よく潮が引いていたため、馬の蹄も潮にひたらなかったほどと詠んでいます。

二見がた遠のみなとやいかならん
塩合は駒の爪もひたらず

「遠のみなと」とは、大湊のこと。では近い湊はというと、二見の三津をさしているのです。

また二見神社前には、平安末期に東大寺再建祈願のため伊勢神宮に参拝に来ていた重源一行が汐合の浦を詠んだ歌碑が立っていました。二つの潮が行き交う景勝の川辺はまた、多くの人々が行き交っていたのでした。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁